こごみのねっこ

認定 NPO 法人フリーキッズ・ヴィレッジにおける暮らしの継承としての日常工法の提案

前橋工科大学大学院　若松均研究室
横関あかね

認定 NPO 法人フリーキッズ・ヴィレッジ

■活動概要

長野県伊那市高遠町三義で活動する「認定 NPO 法人フリーキッズ・ヴィレッジ（以下、FKV)」は、被虐待児、障がいのある子どもたち、不登校やひきこもりなど、生きづらさを抱えている子どもたちを受け入れ、豊かな自然環境の中での共同生活を通じて療養・活動できる場を提供している。

農作業体験、自給自足生活体験、自然体験、環境教育プログラムを提供し子どもたちの精神的、体力的な成長を促すと共に、地域住人との交流による地域社会活性化の促進に貢献することを目的とした活動を行なっている。

■フリーキッズ・ヴィレッジの暮らし

高遠の山里で四季折々の自然に囲まれ、お米・野菜・お味噌・醤油を自給する農的生活を柱に、湧き水を溜めた薪風呂、薪ストーブ、草木染め、地元の土をこねた土壁作りなど、衣食住が自然から与えられていることを実感できる生活を送る。

薪で火を起こし羽釜でご飯を炊く

天ぷら油で走る車

古民家を自身で改修

■フリーキッズ・ヴィレッジの願い

次世代の子どもたちが生きる力を育める、持続可能な「自然とつながり、人とつながる村」を遺したいというヴィジョンを持つ。様々な課題を抱える子どもたちと、「自給自足の大家族生活」を営んでい大きな自然の営みと、多くの人たち支えで生かされている、かけがえのない命に気づき、目の前に与えていただいているすべてのことに感謝ができる生活を通し、子どもたちが「心豊かに平和に」生きてもらえることが願いとして活動している。

子どもたちはここでの暮らしを通し、自然に生かされている命を実感し、自分の得意なことを伸ばすことで自己肯定感が育まれ、前向きな人生が展開していく。子どもたちが独りの人として、精神的にも社会的にも自立していくための自立支援までを活動のミッションとしている。

フリーキッズでは、このような活動を通して『**七世代先までこの場所を存続させたい**』という願いを持っている。

■フリーキッズヴィレッジの活動拠点

FKV によって運営、連携している施設が高遠町・伊那市内に全 7 拠点、点在している。伊那市街地の中に街の居場所としての「伊那まち BASE」、山間の産後の母子の居場所としての「母子支援施設」、高遠町市街地にフォスタリング機関・母子支援等の施設としての「おさんぽ・こごみのねっこ」、高遠町の山間にファミリーホームの「うずまきファミリー」、馬と共同生活を送り山村留学の受入れをおこなう「馬や七福」、標高 1000 m を越えた山里にあるリトリートハウスの「おやまのおうち」、廃校の校庭を活用し子どもたちの遊び場、野外活動の拠点として「みんなの村」が点在している。これらの施設同士が連携し、FKV の活動が行われている。

FKV
9 つの拠点

はじめに

現代私たちの暮らしは、食材や衣服、インフラがカタログのようにあらかじめ用意され、それらを選び取り日々消費することで生活を送っている。建築も同様に、すでにデザインされたものを自分の理想の生活と重ね合わせて様々な条件からより良いものを選ぶことが一般的となってきている。

一方で、本研究対象として訪れたフリーキッズヴィレッジでの生活は、自然豊かな山里の中で生活に関わる食や建物を大人子ども関係なく自らの手や体験を通して作り出している。そこでは、失敗しながらもなんとかやってみること、できたことで「生きる力」を持った人たちが集う場所だった。
現代このような、自らが創造し生産する暮らしを知らない子どもたちに向けて、フリーキッズヴィレッジのような場所を伝え、「生きる力」を育てる拠点として存続していくべきである。

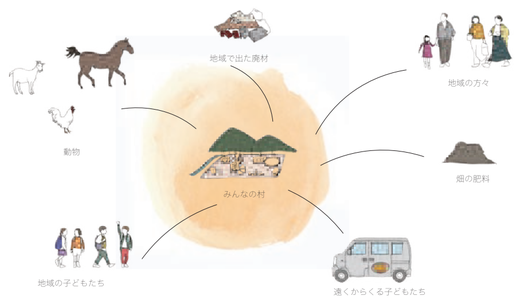
みんなの村 フリーキッズヴィレッジの屋外拠点

FKV の拠点の中で一番山奥にある『みんなの村』は三義中学校跡地を広場として活用した場所で 2004 年より FKV 代表宇津孝子さんの所有土地となった。初めは更地だった場所に FKV の活動の中で 豊かな自然とふれあいながら、地域の方々や山村留学に訪れた子どもたちなど様々な人が利用しながらものづくりが進んでいった。

日常的には子どもたちに放課後の遊び場として解放したり、キャンプ、自主保育の活動拠点など、多世代にわたる利用が進んでいる。また、3 ヶ月に一回のワークショップの活動などから遊具や小屋の制作に取り組んでおり、2019 年度より、植樹活動や水路整備などの環境整備も進んでいる。

FKV の拠点の中でも、みんなの村は特に人とものが集まる拠点であり、個人的に所有された場ではなく、全ての人に開かれてきた場所である。ここでは日常的に、自給自足の暮らしの延長として建物も全てフリーキッズの活動の中で手作業で作られてきたものが残る場所である。
FKV の長期的な未来のために、みんなの村をきっかけとした今後のあり方を構想する。

「これまでのみんなの村の変遷」　→　年表による記録
「フリーキッズの生活の中での建築の位置付け」　→　生活体験・日常調査
「建築の特徴」　→　既存建物の実測・図面化・言語化
現地で以上の 3 項目を調査・分析し、長期的なコミュニティの継承に対して建築にできることは何かを検討した。



みんなの村の変遷　現地でのフィールドワークより

■動き続ける場

研究調査に訪れた日に、偶然みんなの村での建物が動いている場に立ち会った。廃材で作られた基地の解体が決まり、子どもたちが主体となって解体を始めた。ワークショップや、大工さんを交えた大掛かりなものではなく、淡々と子供たちはネジを外し、柱を動かし、1 時間もしないうちに基地はなくなり、廃材が残った。またその後、残った廃材を活用し子供たちが新たな基地を作成しようと作戦を立て、廃材となったパレットを山に運び込み、新たな高台としての居場所が生まれた。

このように、伊那高遠ではイベントごとではなく、ごく日常的な生活移り変わりで建築の形が変わっている。

2024/11/19　10:00-13:30

子どもたちによって制作された基地の下に置かれたタンクの処分が決まる。

その場にいた子どもたちの手によって解体され、更地と廃材が残る。

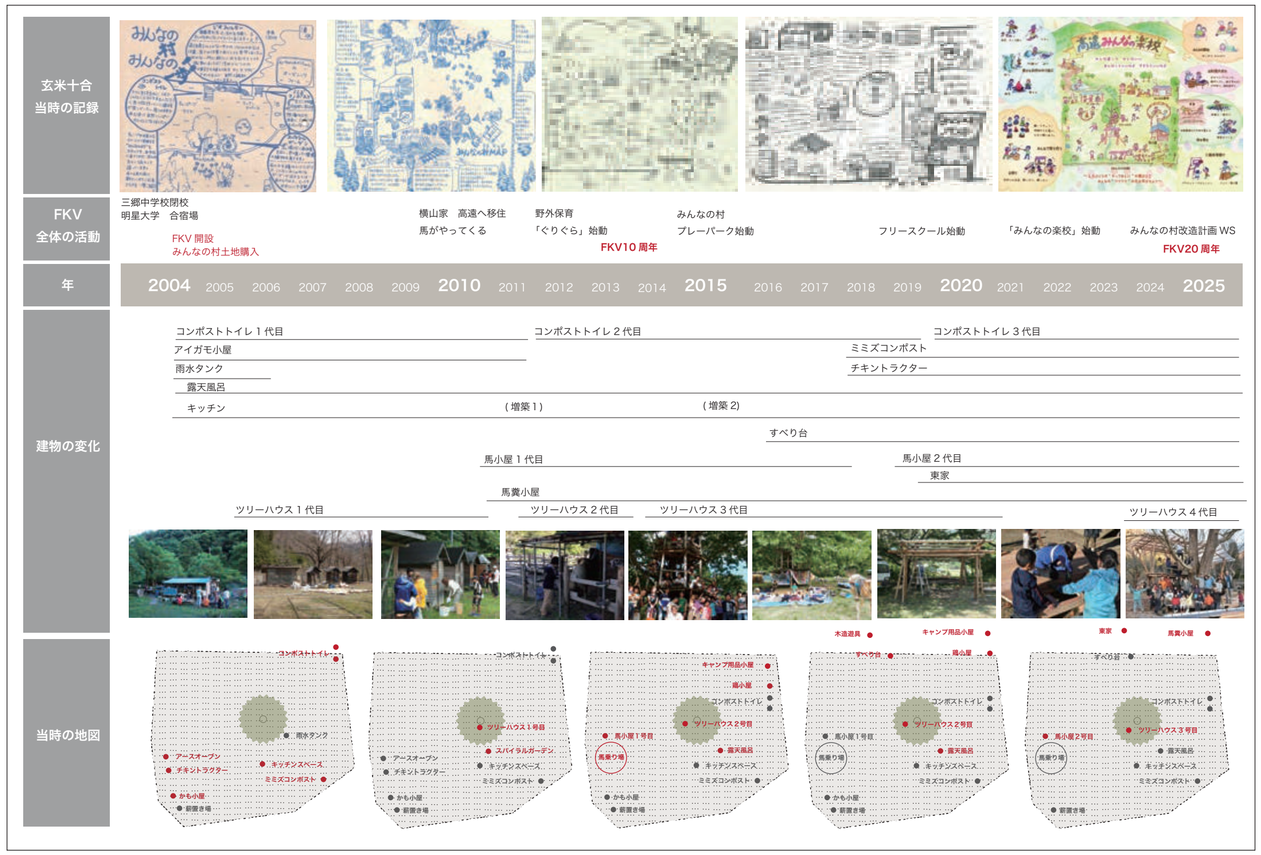
廃材になった床のパレットを大人に手伝ってもらいながら丘にはこぶ。

下にハシゴをかけて高台が完成した。

■建築の寿命と創り続けること

一般的な木造建築の寿命（完成から解体されるまでの平均）は 65 年といわれている。設計者は断熱性・気密性の向上や耐久性のある材を使用することで寿命を延ばし、建築が長く残ることに価値を置くことが多い。一方で、FKV における木造建築の寿命は 3-10 年と短命である。

長期的に既存の形は残らないものの、解体した材を活用し新たな建築が生まれて行く。これらは 1 つの建築の寿命に焦点が置かれるのではなく、材の生涯が続き、自然のものの成り行きに合わせた建築の姿であると考える。このように、FKV のコミュニティを継承していくためには、長く残るような建築の保存方法ではなく、これまでのあり方通り、建築を建てては壊し、常に人や材や形が変化・循環していくあり方が必要であると考える。



日常工法

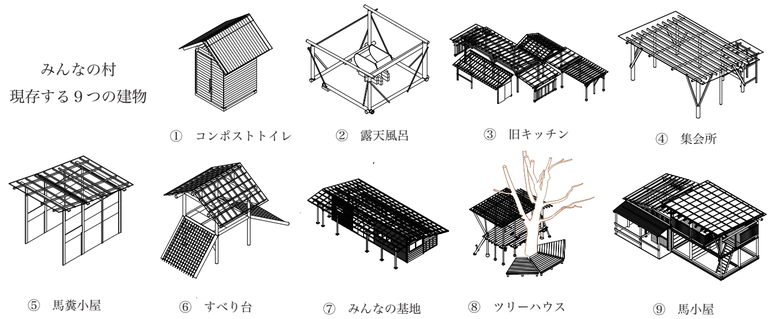
■　既存からの学び

みんなの村に現在（2025 年）残る 9 つの建物について、これまで建築を通した人やものや知恵などの情報を探った。

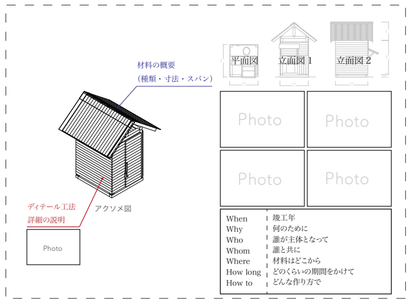
実測・図面化　→　身体性・スケール

ディテールの調査　→　工法や成り立ち

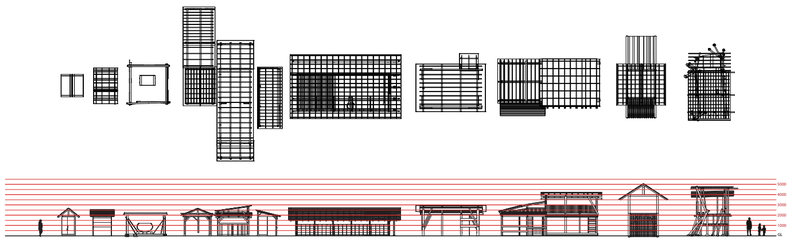
5 W2H　→　建築に関わる人やものの流れ



データシート例



■既存建物のスケール



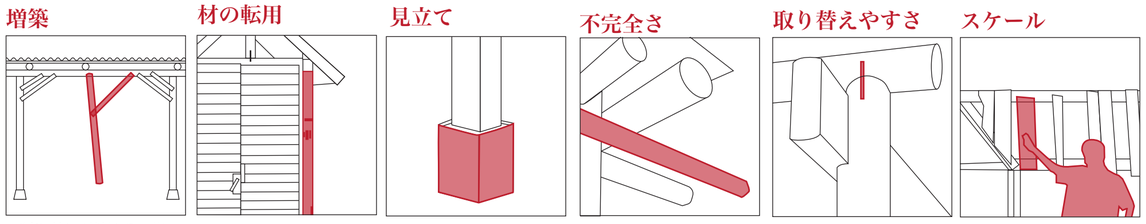
みんなの村の建物は多くの人の手垢が残り、可変性を持ち続けている。

これは、建築に対して作ることと使うことにヒエラルキーがなく、「つくること」は「育てること」のように見える。

このような建物は、様々な人がその場にあった材料と応答した結果として、様々なアイデンティティを持った形になっており、伝統的な工法にみられるような木組みや工程ではないものの、その場での即興的なアイディアや偶然的な材の出会いによって形作られている。

以上のような建築の造られ方を「日常工法」と名づけ、伊那高遠での建築のあり方を類型化していった。

時間的要素・施工簡易性・身体性などの側面から、日常工法によってできた建物が特徴づけられている。



既存に対して試行しその場にある材料で機能を付加させる

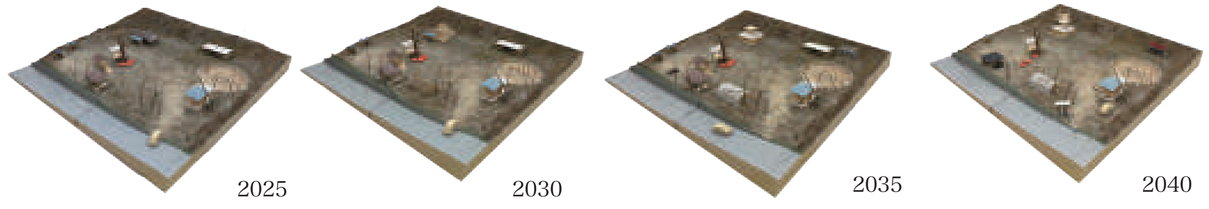
元の利用形跡が残されたまま別の機能として活用される

形の類似性から別の物で代用

将来的に付加要素がつくようなとっかかりを残す

接合部が簡易的に作られ工程や材が可視化されている

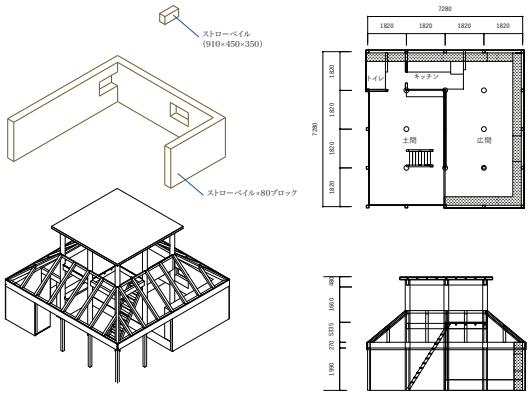
子供でも手の届く高さ・大きさ



本設計では、敷地内にある素材を使い、現地のこどもと大人だけで組み上げられる工法（日常工法）を用いた建物を設計する。

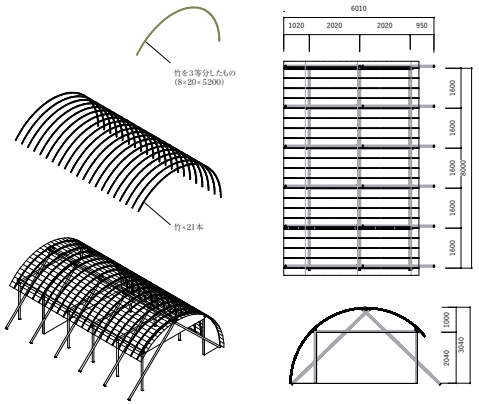
長期的に設計物が既存の建物と立ち替わり、材の循環を加速させていく。

託児所



馬のエサにも使われる藁のブロック（ストローベイル）を断熱材として利用し、季節問わず未満時の子供や親が休めるような居場所とする . 屋根の間に挿入された半２階部分からは敷地全体を見渡すことができる。

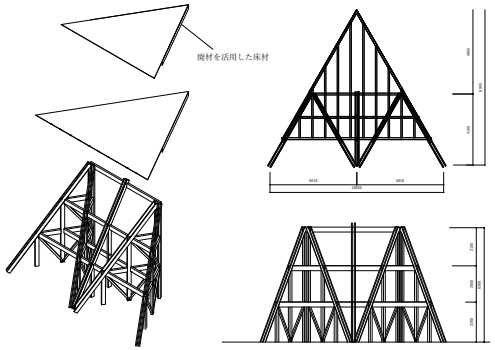
加工場



廃材となった竹を活用し円弧型の加工場を設計した。緩やかな仕切りによって加工場だけでなく、子どもの遊び場やバスの待合室など他の機能にも対応した形となっている。

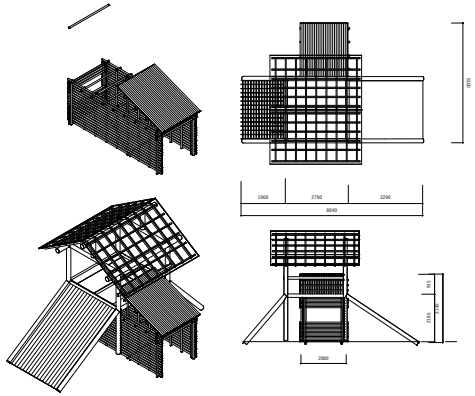
単純な構造の連続によって将来的に延長していく可能性を持った形態とした。

高台



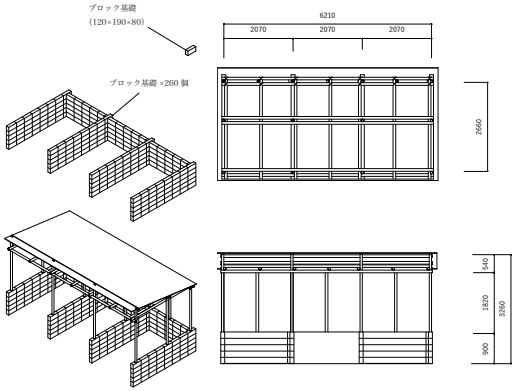
子どもたちが山へアクセスしやすく、遊びへ展開しやすいように床部分を山に突き刺し、大地を取り入れ構造が成立するような作りとした。将来的に山への形態の反復を繰り返すことで、同様の建設方法で居場所を増やすことができる。

すべり台基地



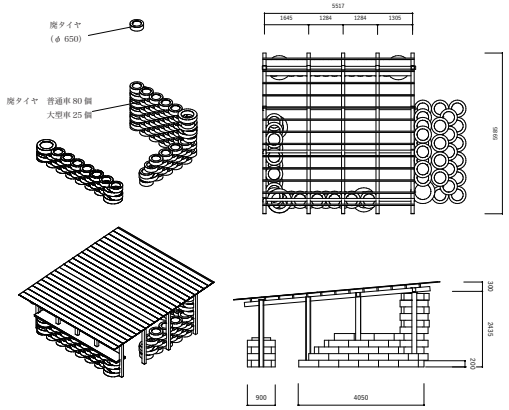
現存するす竹を活用し竹の凹みを重ねて屋根としている。壁部分は左右上下に重ねている。細い廃材を交互に編み、半屋外の隠れ家を制作。既存のすべり台に増築し、その後すべり台が無くなった後、基地だけが残る。

馬糞小屋



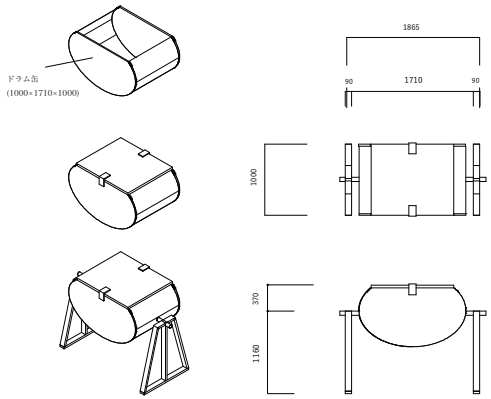
ブロック基礎を重ねて足場とした、ブロック基礎の間にあいた隙間に鉄筋足場のポールをさし、屋根を支える構造体とした。３つの分割された仕切りにタイミングがずれ合いながらも馬糞がうつされ、隣の場所に土を組む高さになる。

タイヤ東家



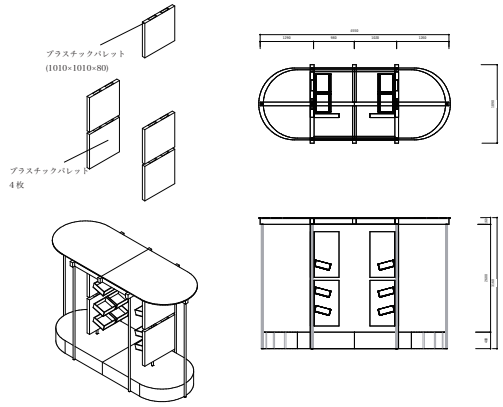
敷地に多数転がっていた利用されていない廃タイヤを活用。タイヤの中に土とゴミを重ねて構造体とした。周りには土壁を塗り耐久性と統一感のあるデザインとし、タイヤの連続によって様々な高さができ、子どもた作りやすく遊びやすい建築の材料である。

回転式コンポスト



ドラム缶を活用した露天風呂が解体され、ドラム缶が残ったのち、足をつけて回転式のコンポストトイレを設計した。丸い形を活用し回転させ、肥料を発酵させやすいような形となった。木以外の素材が、みんなの村の中で長期的にいろんな形へ変化していく可能性が見える。

野菜直売所



プラスチックパレットの板の間にある隙間にポールエオ差し込み、軸回転扉とした。その横に木の箱を設置し雨風にも耐える野菜直売所を設計した。基礎は園芸支柱を型枠としたコンクリート基礎を想定している。